

[Report]

## **Pediatric Nursing Practice : the Effect of Training During Childhood**

Ayako Yoshida

Aino Gakuin College

### **Abstract**

We surveyed the reports submitted by the students who attended the practice for nurturing schoolboys in order to know whether or not the practice really gave a chance to the students to understand the healthy children. Our survey indicated that the students acquired deeper understanding of healthy children through experiencing their daily life.

**Key words** : child nursing, practice for a nurturing schoolboy, nursery school practice, understanding of healthy child

## 小児看護学実習における保育実習の意義

芳 田 章 子\*

**【要 旨】** 本学小児看護学実習では、子どもの健全育成理解のために保育実習を通じて健康児の理解と、保育内容の把握を実習目標にしてきた。平成8年度より乳幼児を対象とした保育所実習に加え、学童期の子どもを理解を深めるために学童保育実習を新たに設定した。

今回、学童保育実習が健康児の理解のための学習の機会となっていたかを、学生が記した経験内容と所感から振り返った。その結果、学生は子どもたちの遊びを中心とした日常生活を直接的に体験することで、健康児を理解していることが明らかになった。

キーワード：小児看護学実習，学童保育実習，保育所実習，健康児の理解

### はじめに

子どもが健康に育っていくことは、家族や社会の幸せであり、喜びである。保育、保健、看護のそれぞれの分野では独自の知識と技術をもち、子どもの成長発達を助ける仕事が行われている。近年、小児病棟で働く保育士が増加している。子どもの健全育成のために専門家の力が強く求められているからである。

小児看護学では、養護と教育が一体となって豊かな人間性をもった子どもを育成する保育所を学習の場としてきた。本学でも子どもの理解と同時に、日常の保育における保健活動を知ることを実習目標としてきたが、小児看護の対象として比較的多数を占める学童期の子どもを理解する学習機会が設けられていなかった。乳幼児期の子どもに行われる情緒の安定した環境のなかで、基本的な生活習慣の自立を中心に健全な心身の発達を図る保育と違い、社会性が増し、好奇心を発揮し知的能力の獲得が促進される学童期の保育、教育を理解する必要性が大きいと考えられる。保育所実習や障害児施設実習の報告にくらべ、学童保育実習の取り組

みに関する報告が稀であるので、今回、本学において工夫してきた保育実習とそのなかの学童保育施設における実習を振り返りその意義について報告する。

### I 本学小児看護学実習における保育実習の位置づけ

成長発達および人間形成の過程にある小児と家族に対する看護実践を目指し、個別性をとらえた養護、看護、保育が必要であるとの考えから保育実習を学習方法の一つとして実施してきている。看護の基本的な知識と技術に基づきながら、子どもの世話や母親に対する保育支援の方法を学び、病児とその家族への看護を深めることを期待されている。

看護の実践能力を高めるには、対象との人間関係を成立発展させることが必要不可欠であり、実習方法の検討・工夫が求められる。しかし、新生児期から思春期までの幅広い対象を個別的に理解し、世話をすることは青年期の学生には難しいことである。核家族、共働き、少子化、商品化された育児・保育・教育・介護

\* 藍野学院短期大学

や病院など施設で迎える誕生と臨終などの社会的現状を背景にして育った学生の戸惑いがしばしばみられる。それらは赤ちゃんを触ると壊れそうで怖い、泣くと困る、泣く理由がわからず困る、言葉や遊び方がわからない、子どもの動きについていけない、汚い、わがまま、お母さんと何を話してよいかわからない、など枚挙に遑がない。

このような状況下でスムーズな小児看護学実習の導入と子どもとの関わり方を学ぶことに主目的をおき、昭和62年（1987年）から保育所での実習（以下保育所実習）を実施してきた。目標を、1）乳幼児の発達を理解する、2）生活援助を実践する、3）安全と保健衛生面から保育環境を考える、4）発達段階に応じた保育方法を理解する、とし、0歳から就学前までの乳幼児を対象とした。

## II 保育実習の移り変わり

保育所実習は、茨木市の市立保育所の受け入れによって実習が開始された。平成7年度の例では、受入れ側の体制が整う学生の夏期休業期間に24時間（3日間）の実習を行った。病児の看護を行う前に健康な子どもの理解が必要と考えているが、保育所と本学のカリキュラムの事情により、およそ60%の学生が保育所実習の後病院実習を経験する状況であった。

保育所実習を経験することにより病院実習の効果が高められることが、平成8年度の教育評価（芳田章子と豊川恵子、1996）で明らかとなったため、実習計画の改善を積極的に行うことになった。平成8年度大阪市内の私立保育所・保育園・幼稚園の3施設で4月と8月に保育所実習が開始された。このとき始まった学童保育実習のため実習時間数は16時間（2日間）とし、全ての学生が病院実習前に保育所実習を経験することになった。しかし、4月または8月に保育所実習を行った学生のなかには、病院実習までの期間が最長3ヶ月となったものもあった。

学童保育実習は、病院実習で学童期の子どもを受持つ頻度が高く、学生が乳幼児とは違う発達段階の子どもとの関わりに不安を抱いたり、子どもに振り回されることも見られたため、平成8年度より開始した。学童期の子どもの成長発達と異年齢集団で行う活動を理解する目的で、茨木市の留守家庭児童会と吹田市留守家庭児童育成室において開始し、平成10年度から茨木市のみで実習を行っている。実習時期と時間数は、夏期休暇期間中に16時間（2日間）、平成10年度よ

り病棟実習の直前に8時間（2日間）を実施している。健康な乳幼児と学童を理解した後、継続して病院実習を可能にするため実習施設と内容を変更しながら3年間が経過している。

## III 新カリキュラムと小児看護学実習の形態

健康な子どもを理解した後に病児の看護を学ぶ実習は、平成9年度のカリキュラムにおいては不可能であった。しかし、平成10年度の実習は翌年のカリキュラム改定の前倒しによって、新カリキュラムで実施されることになり、望ましいと考える小児看護学実習の形態が実現できる運びとなった。

小児看護学実習は3単位135時間から2単位90時間と縮小され、子どもと接する機会が少ない学生にとって子どもとの関係づくりがさらに厳しくなると予測された。そのため乳幼児と学童の保育実習は大きな役割を担うと考え、保育所実習は8時間（1日間）、学童保育実習は8時間（2日間）に縮小しながらも継続させた。病棟2ヶ所と保育実習施設3ヶ所、学童保育施設25ヶ所を抱えた実習（平成10年度）は、教育の他に実習に関連する調整や管理を必要とし、教員には大きな負担となるが、確実な学習効果を得ている。

## IV 学童保育実習の目的と現状

学童保育は放課後の子どもたちの生命と生活を安全に、そして楽しく豊かなものにするという目的をもって運営されている（村山士郎、1998）。小学校の敷地内に独立した建物か、もしくは校舎内の空き教室を利用し、小学校1年生から3年生を対象に保育がなされている。授業のある日は下校時から午後5時まで、学校の休業日は午前9時から午後5時までとなっている。児童数は地域差がありおよそ20人から50人、なかには障害児や外国人の子どもも含まれる地域がある。指導員が配置され、指導方針・計画に基づき運営されている。

学生の実習は、学内において学童保育の指導要領や入会についてなど学童保育事業に関する説明を受けることから始める。学童期の成長・発達を事前学習したのち、1施設に1名もしくは2名の配置で実習に臨む。実習当日、指導員よりオリエンテーションを受け、指示のもとで子どもたちと行動する。子どもたちの活動は、ボールを使った遊びやゲーム、鬼ごっこなど戸外

(校庭など)の遊びと、室内でごっこあそびや手芸や編み物、お絵かき、宿題などがある。学生は子どもたちの誘いに応じその両方に加わって活動し、1日の終了時に子どもたちの「終わりの会」に参加、最終日は指導員との反省会を終える。子どもたちとの活動を振り返り、実習内容と感想をまとめた記録用紙を実習終了後に提出する。今回、1998年5月から11月の期間に学童保育実習を行った学生(86名全員)の実習記録から実習内容と所感についてまとめた。内容は、

表1 子どもたちの印象に関する学習報告

- ・「先生、先生」とすぐに打ち解けてくれ、なじみやすく接しやすかった
- ・元気で人なつこい
- ・生意気でなじみにくいと思っていたが向こうから寄ってきたのが意外だった
- ・最初はとても緊張したが予想以上に子どもたちが遊びに来てくれたので安心した
- ・今時の子どもはなまいきと思っていたが素直で人なつこくてかわいい子たちばかりだったので安心した
- ・遊ぶのも、失敗するのも、楽しむのも、つらいのも全部全力である
- ・仲間はずれや3年生が1年生に偉そうにものをいったりするひとつの社会があった
- ・正直で思ったことは率直に口にする、大人がつまらないと思うことでも興味をもつ
- ・話し声は大きく、我先にと話しかけてくる、無邪気でかわいい
- ・1年生は順番が待てず、独占欲が強い
- ・人見知りせず近づいてきたかと思えばほったらかしにして自分たちの遊びに夢中になるところが幼児とは違う
- ・絶対してはいけない危険なことをしたり、服を汚しながら夢中になって遊んでいる
- ・口で偉そうなことをいっても自分を見て欲しいという気持ちはどの子も同じであることを忘れてはいけない
- ・一人で行く子、集団の中で自分の居場所を明確にしている子それぞれであった
- ・親が働いているせいかよく気がつく子どもたちであった
- ・自分が甘えるよりもリーダーシップをとって学年に関係なく集団をまとめようとする子がいた
- ・言葉で表現できる子と後からついてきたり、ことばで表現しない子がいる
- ・自分を抑える、他人に譲る、思いやることができている成長の速さに驚かされた
- ・子供同士で注意し合っ助けて毎日過ごしている
- ・集団生活をするにより協調性やルールを守ることを学んだりしている
- ・ケンカの限度がわからない、少子化で兄弟や近所での子ども同士の触れあいが少ないためか
- ・保育所実習のとき以上に一人一人の個性が出ている
- ・個性は著しく、自己主張も激しく改めて子どもたちは違うんだと思った
- ・幼稚園でみた子どもと年齢が余り変わらないのにとてもしっかりしていた
- ・太鼓や花笠などの活動を披露してくれたが、自信をもち何に対しても努力できる子になっていると思った
- ・ケンカのあと一緒に遊ぶ、悔しさを瞬間で忘れてたりと適応力がありこれが子どもの強さ
- ・1年、2年生はまだ甘えたいところがあるんだと思った
- ・「先生遊ぼう」というのは1年生に多く3年生は落ちついている

1) 子どもたちの印象について、2) 遊びと性差について、3) しつけと対応の仕方について、4) 病院実習との関連について、5) その他、に分類することができた。

子どもたちの印象においては、最初の関わりに不安を抱きながら実習に臨んだ学生の気持ちが表れており、「受け入れてくれて安心した」という受動的な姿勢が見られた。子どもとの積極的な関係づくりはできないながらも、先に終えた保育所実習で得た幼児の発達と比較しながら、低学年の子どもたちの運動や言語などの発達について観察ができていた(表1)。

遊びと性差については、欲動に突き動かされ一心に遊ぶ子どもの姿や、学年によって遊びの内容が違ったり、ルールを作るなど遊びが発達する過程を直接体験できている。また、遊びという形態から男女の分離について観察している(表2)。

しつけと対応の仕方では、喧嘩や叩く蹴るなど衝動行為への対応が重要であるとわかりながら実践できない自分の態度に対する葛藤が読みとれる。子どもの反応を見分けられず学生自身の価値観で対応したため最後まで口をきいてもらえなかった学生もいた。そのほか、自分が子どもの時に大人に抱いた否定的な感情が今はじめて「間違っていた」と気づき、子どもの気持ちや人格形成の途中にあることをふまえた「発達に望ましい対応」について考えた学生、危険回避能力が十分に発達していない子どもの安全を考える記述があった(表3)。

病院実習との関連について、健康な子どもたちの活動がどのようなものか理解することで、それを妨げられる苦痛に対し援助が必要だと考えることができている

表2 遊びと性差に関する学習報告

- ・遊ぶことが好きで、遊び上手である。成長発達にどれだけ遊びが必要であるか実感した
- ・子どもはそこにあるものは何でも遊び道具に変えてしまう
- ・元気に外で遊んで走り回る。遊ぶことに熱心に取り組んでいた
- ・同じ遊びを飽きるまで繰り返す、勝敗のあるものは自分が勝つまでしようとする
- ・学年によって遊び方が違った
- ・自分たちで遊びのルールを作り出している
- ・成長発達にどれだけ遊びが必要か実感した
- ・女子の方が積極的に話してくれ、遊んでくれた
- ・男の子、女の子同士で遊ぶ場合が多いが、混じり合っ遊ぶこともあり性差が際だっている印象はなかった
- ・男子は多人数で途中で抜けたり入ったりするが、女の子は数人ずつグループができていた
- ・男子は男の子、女の子は女の子で遊び男女一緒に遊ばない

表3 しつけと対応の仕方に関する学習報告

- ・指導員の態度ははじめのあるきびきびしたもので幼稚園とは違っていた
- ・指導員はやっていいこととそうでないこと、注意したり怒ったりしていた
- ・良いこと悪いこと、規制する時は威圧的にならないように注意した
- ・してはいけないことを理解できる言葉で伝えないといけない
- ・甘え上手な子とそうでない子にうまく関わるのが難しかった
- ・子どもが離れてしまうような気がして怒るべきところで怒れなかった
- ・子どもとの話し方や注意の仕方にも工夫ができた
- ・子どもの人格形成に関わるので、注意や欲求の充足などかねあいが難しい
- ・子どもに褒め優しくしてやることは簡単だけど、叱るべきところで叱るのは難しい
- ・児童の安全を守ることと、その前に危険が及ばないように自分自身が気をつけなければならないと痛感した
- ・怒るとき聞いてもらえなかったのは遠慮していたからだと思った
- ・度を越したケンカに対応ができなかった。互いの言い分を聞いた上で対応すべきだった
- ・叱るタイミングがわからなかった。その子がどんな気持ちでいるか、どんな経緯でそうなったかという目で見ることがあった
- ・グループ同士の対立をどうしてよいかわからず立ち入らなかった
- ・「先生に見られると怒られるから」という考え方はあらためてほしいのでその時言うべきだった。子どもから拒否されるのが怖くて言えなかった
- ・複数対ひとりのケンカはひとりの方をかばいたくなる。いじめられている子は善し悪しに関係なく精神的に支えるのが大切なのか、わからなかった
- ・独占欲の強い子に「みんなて遊ぼう」と手をひっぱっていきような関わりができたなら良かった
- ・グループ同士の対立にどのように対応していけばよいかわからない
- ・一緒にいた子が他の子から文句を言われ泣き出したときどうしていいかわからなかった
- ・男の子の言葉づかいかや暴力への対処方法がわからなかった
- ・話しかけてこない子には積極的に声をかけ、みんなの中に入れていけるようきっかけを作る
- ・怒るとき、指導が必要な場面では信頼関係が築かれていないと効果がない
- ・教師でもなく母親でもなく子どもたちを見ていることが不思議な気持ちにさせたが、子どもたちの気持ちを発散させる役割を心掛けた
- ・危険の予測や判断能力、観察する力なども身につけさせていかなければならない
- ・素直な分こちらは慎重に言葉を選ばないと傷つけることになる。手本になること
- ・子どもの興味、楽しみ方、理解力はどれくらいか、ひとつを伝えるのにどう表現したらよいか、すぐにわかってもらうにはどうすればよいかいつも考えた

る。また、「共稼ぎで、保育者が一時不在の家庭」の子どもから家族について話を聞き、親に対する関心が高まる機会となっている（表4）。

その他では、子どもとの関係をどのような立場で結べばよかったか、発達の程度など相手をよく見て個別

表4 病院実習に関連する学習報告

- ・健康なときはこんなに元気だから、入院時は精神的なケアが必要だと思った
- ・小児病棟で看護していく上で社会復帰にも目を向け援助していきたいと思った
- ・学童期の病児は、健康な子どもたちよりもっと精神面で複雑さが加わるように思った
- ・普段これだけのびのびと元気に遊んでいる子たちが、入院、安静となったときは大きなストレスがかかるのだろうと感じた
- ・この時期の集団での生活、友人関係はとても大事なことから、ベッドから離れることができない子がいたら動ける子と呼んで遊べるようにしなければならない
- ・疲れを知らない子どもたち。入院後は押さえ込まないようストレスが溜まらないようにするにはどうしたらよいか学んでいこう
- ・家庭で受ける養育を病院ではナースが行っている。適切な養育をしなければならず患児との関係について考えさせられた
- ・仕事をしている親もストレスを抱えていると思うので、心理面のケアも大切ではないか
- ・子どもを育てて行くには親同士のコミュニケーションも大切。親子で成長していくのだと知った
- ・やはり子どもはこうでなくては思わせてくれたこともあり、看護を行うのに重要なことが多かった

の対応が必要であったこと、子どもにとって望ましい環境に関する気づきが見られる。障害児を差別する子どもを目の当たりにし、健康な子どもと一緒に保育する難しさを感じたり、そばに寄ってきた子どもだけに対応したことへの反省、「おんぶ、抱っこ」と甘えてくる子どもの家庭背景を知り、親子関係を考えさせられる記述があった。保育所実習で関わった年長児と月齢差がほとんどないのに、ともしっかりしていた児童がいたことで、子どもの成長・発達の著しさや個人

表5 その他の学習報告

- ・子どもの中に入っていきはすごく難しいと改めて実感した
- ・同じ顔ぶれが寄ってくるので遊んだが、他の子にひいきしていると思われな心配
- ・みんなで遊ぶことで他人をいたわる気持ちも育つ
- ・全員と関われなかった、声を掛けてくれたのに申し訳なかった
- ・接し方を失敗したのは園児と同じように接したからであった。幼児期と学童期の違いを理解すべきだった
- ・性別や性格、家庭環境などそれぞれなので、接し方を子どもに応じて変える必要があった
- ・子どもと同じ立場ばかりでなく「先生」という立場での関わりをもっとうまくとりたかった
- ・自分が困っているときそれが子どもに察知された。いい加減な態度は見透かされていると思った
- ・大声を出す子はうるさいなと思っていたが、何かをアピールしてるんだという別の見方ができるようになった
- ・子どもの得意なところをほめ、認めてあげることの大切さを学んだと思う
- ・子どもはよく見ているのでいい加減なことではできない
- ・子どもの家庭環境を把握して、微妙な表情や言動の変化に気づいてあげなければならない

- ・遊びは知らなくても子どもに教えてもらうようにすればよい、一緒にしてみたりする態度が大事だと思う
- ・大人が手を出してあらかじめ準備をすることはよくない。自分から何かしようという気持ちが自立につながっていく
- ・精神的にも身体的にも個人差が大きく、発達段階に合わせ関わり方をかえなければならない
- ・保育所実習ではこのように騒がしくなかったのが大変だったが、自分の小学生の頃を思い出し、管理的な立場にいないようにしなければと思った
- ・最近の子はというイメージを抱いていたが、自分の小さい頃と変わらなかった。子どもたちにとって楽しい場所にしていかなければと思った
- ・気持ちが悪いとか顎が変だとか、障害児と健常児の交流は難しいと思った
- ・子どもが苦手だったがいつの間にか子どもたちのペースに乗せられて一緒に遊べていた自分がいた
- ・2日間でほとんどの子を1回は会話をするように心掛けたことはよかった

差を学ぶことができたという記述もみられた(表5)。

## VI 考 察

学童保育施設では異なる学年の子どもたちが生活するため、同級生同士の学級集団とは違う関係のなかで子どもの生活や様子が観察できる。今回の記述は、子どもと一緒に過ごした日常生活場面を通し、子どもの精神発達を中心に観察した内容がほとんどであり、形態的発達についての記述は1つだけであった。それは、学童の精神発達が乳幼児とくらべ顕著に違うことに気づいたためと考えられる。子どもたちがリーダーやメンバーの役割を身につけていること、下級生や障害児など自分と違う立場や状況にある子どもに対する思いやりの態度をもつこと、反面、自己中心的な発言や態度を押し通し、いじめや差別をする子どもがいることも知ったようである。形態的発達は平均値を知ることによって把握しやすいが、精神発達においては、個別性があり実際に子どもと関わることによってより理解が深められるものである。学童と行動をともにすることで、その子どもの興味や関心、友達関係とその能力などを把握することができる。ギャングエイジと呼ばれるこの年齢の子どもは、概ねグループで活動する傾向にあることから、乳幼児を対象とした保育所実習では学ぶことができない集団活動の意義について理解する機会となる。これは異年齢の集まりである入院中の子どもの生活上の障害、つまりどのような欲求が入院・治療という規制によって充足を妨げられるか、その要因と解決策を考えるために重要な役割を果たすことになる。

さらに学生は、活動的な健康な子どもがわれわれの

働きかけに対する反応より、子ども自身から刺激を多く発していることに気づいている。実習初日の関わりにおいても子どもたちの能動的な行動によって緊張していた学生が安心感を得ることができた。その他に子どもたちの働きかけで、遊びの仲間に入れてもらうことができている。このような子どもの働きかけは、意欲や自我、情緒の発達が高められる時期の特徴といえる。病院実習と関連した記述内容から、病気であること、すなわち多くの規制が加わることが子ども自身からの働きかけを少なくすると理解できている。病気療養中とはいえ子どもの能動的な態度を養い、発揮させるような積極的な働きかけを展開していくには、その目標となる健康な子ども像を学生自身が把握しておくことが不可欠であると考えられる。

実習内容と所感の記述の多くは、子どもへの対応の仕方でも苦慮したり、反省したり、そして学習した関わり方についてである。援助を成立させる前提が人間関係であることは、相手が子どもであっても同様であり、とくに発達に個人差がある子どもへの対応方法は千差万別である。学生の記述は、大人の関わり方、関わり方の基本姿勢に関した内容が多い。どのような立場に立つか、これは状況に応じて変わるため経験を積むことが必要だと思われる。昨今、授業中に児童が騒ぎ、授業が成立しない「学級崩壊」は、過保護や基本的生活習慣を身につけさせる配慮が少ない親が増えたためと言われている。このような社会情勢のなかで、「子どもの視点」で考えることを優先し関わる努力をしている学生にとって、大人(保育者)の立場と子どもの立場の双方を考え、子どもの成長発達に望ましい関わりについて結論を出すことは難しい。しかしながら、はじめをつける、先生の立場で関わりたい、などの記述もみられることから、子どもの目線に聞く、話すことは大切であるが、しつけは教える者と教えられ者の立場を明確にしなければならないことに気づいていると考えられる。「嫌われたくない」、「嫌がっているのに」といった感情をもつことや友達関係の中ではしつけはできないことを、うまくいかなかった子どもとの関わり場面を振り返る、または指導員の姿勢、態度から学んで欲しいと考えられる。

保育所実習の後で学童保育実習を体験し病院実習に臨むことは、子どもの著しい成長発達を継続して理解でき、病児の看護に役立てる実習形態が整ったと言える。しかしながら子どもとその家族が看護の対象である小児看護学の学習を進めるには、子どもを監護する親(家族)についてその役割、育児姿勢などを学ぶ機

会を増やすことが課題となる。現在の子育ては外注化、商品化され親や家族の姿がみえにくい状況にある。子どもの家族と関わりを広めるには、送迎の時間帯に、または保護者参加の行事日に保育実習を計画することになるだろう。知識を深める方法として、学生自身が新しく家族をつくるという状況設定で、ライフサイクルをたどった家族の発達を模擬体験させる方法がある。体験することにおいては、親子で取り組む活動に参加する、ベビーシッターを行うほか、サークル活動やアルバイトなど学生自身が異年齢の集団の中で、家族以外の対人関係を築く機会を積極的に提供する必要がある。

## 結 論

異年齢集団における小学校低学年の子どもの成長発達を理解することを目的として、学童保育実習を実施している。1998年に実習を行った86名の学習報告は次のようであった。

- 1) 子どもは、素直で思ったことを口に出し何事にも全力でぶつかる
- 2) のびのびと元気に活動し、衝動が抑えられず喧嘩をする
- 3) 幼児に比べ個性がはっきりしている
- 4) 人を思いやるなどの向社会性を身につけてきている
- 5) しつけや指導は友達関係では行えない
- 6) 親に甘えたい欲求が充足されないいろいろな行動にでる

などを理解した。一度にたくさんの事が起こりそれらに対処しなければならない状況で、日常の子どもの生活を直接的に体験できる意義深い学習の機会であるといえる。

## 引用文献

- 村山士郎：私の学童保育論，124-149，1998，桐書房  
芳田章子，豊川恵子：小児看護実習目標の到達状況の検討——学生の自己評価の分析——，藍野学院紀要，10：47-57，1996